

## コントラストの談論

水無瀬 海莉

アカデミーに入ってから二か月と少し。

寮生活にもそろそろ慣れてきて、時間を有効に使った生活リズムが出来てきている。空き時間に以前から気になっていた本に目を通して、後ろから肩を叩かれた。

「ねえねえ志苑くん」

読んでいた本から視線を上げると、濃いオレンジ色の瞳とかち合う。

「なんですか？」

「読書を楽しんでるところ、ごめんね」

「いえ、これは必要だから読んでるだけです。ところで、何か？」

「よかったらこれ、もらってほしくて」

「コーヒー、ですか？」

真央くんが手にしていたのは、一本の缶コーヒーだった。

「うん、間違えて買ったの」

どこに間違える要素があるのかと缶コーヒーのデザインをしげしげと見ていると、焦ったように真央くんが口を開いた。

「もしかして、ブラックコーヒーは嫌い？」

「いや、好きですが。なぜ間違えたのかと思っただけです」

「隣のカフェラテと間違えて押しちゃったの。よくあるでしょ？」

自分にはない経験だったが、彼にはよくあることなのかもしれない。

これ以上問う必要も感じられなかったので、俺は軽く頭を下げる。

「では、遠慮なくいただきます」

「はいどうぞ。むしろ受け取ってくれてありがとうなの」

コーヒーを受け取り、これで要件は済んだかと思われたが、彼はそのままこの場に残り話しだした。

「志苑くんって休みの日は何してるの？」

「特別なことはしてないですよ。課題や読書、修行などやることは多いですからね」

「え、じゃあ遊びに行ったりは？」

「しないですね」

質問にはっきりと言葉を返すと、真央くんは数秒考えこむような素振りを見せる。そして、大きな目をパッと開くと――。

「もし嫌じゃなかったらだけど……、たまには遊んでみたりしない？ 今度玲央と行こうと思ってるお店があるの」

と、明るく提案してきた。

「どうして急に？」

「志苑くんともっと仲良くなりたいなって思ったんだ」

自分の思ってることを素直に伝えてくる真央くんの言葉に少し戸惑う。

「志苑くんが一緒なら僕はすっごく楽しいと思うんだけど、どうかな？」

それに気づいているのかどうか、彼はダメ押しと言わんばかりにそう言い、首を傾げた。

普段はこういった誘いに乗らないのだが、たまには息抜きがあってもいいかもしれない。彼の期待に満ちた目に、そう思わされるのは一瞬だった。

「一緒に行く玲央くんがいいなら是非」

「やった！　うれしいな」

俺の答えにぱっと笑顔を見せると、真央くんは自分のスマホをこちらに向けてくる。

「今気になってるのはこのカフェなんだけど、うさぎさんと一緒に遊びながら可愛いお菓子が食べられるって話題になってるんだ！　あとはこっちの……」

「いや、俺が行ってもいいのか玲央くんに先に確認を取るべきでは？」

「玲央ならきっと大丈夫だよ」

勝手に話を進めるのは、と口を挟むが、どうやら不要な心配のようだ。

「楽しみだね。志苑くん」

「そうですね」

いつの間にか彼との会話を楽しみ、自然と相槌を打つ自分に驚くのだった。